混迷に輪をかける「大阪都」構想

2011 年 2 月 11 日、大阪天満橋で「東西の学者が語り合う 2・11 シンポジウム「大阪都構想」を越えて」が開催された。地方自治を揺るがす「大阪都構想」なるものに危機感を感じたので、名古屋から参加した。超満員の参加者の熱気に圧倒されながら、7 人の研究者のあつい報告に耳を傾けた。当日の発言記録(『地方自治ジャーナルブックレット』公人の友社、2011 年)から、加茂利男さんの表題報告を抜粋して紹介する。

「大阪都」という言葉は確かにインパクトがあります。日本中どこにでも「市」は掃いて捨てるほどにあるわけですが「都」は東京しかない。そういう本当に希少価値のある自治体にしようということです。この案には一種の言葉のオーラが感じられるのではないかと思います。辞書を引きますと、「オーラ」とは「正体のはっきりしない雰囲気」と書いてあります。「大阪都」という言葉は大変重々しくありがたい言葉ですが、どうも正体がはっきりしない。

歴史というのは、実は時にこういう実態や現実性のないあやふやな言葉によって揺り動かされることがままあるわけです。これまでの日本の為政者たちは社会が混迷し閉塞に陥ったときには、例えば元号を変えるとか、遷都をするとか、いろいろなことをやって、言ってみれば言葉のマジック、シンボル効果みたいなものによって人心を収攬するというやり方を常套手段にしてきた面があります。「大阪都」も「都」にすれば、困っているいろいろな問題がいっぺんに解決するのではないかというイメージを持たせる。そういう言葉のマジックみたいな機能を持っているのではないだろうかという気がするわけです。

第二次大戦中の 1943 年に、時の政府は国力・権力を集中させるために法律を改正して、東京市や区を廃止して従来の東京府に「都」という名称を与えて、そのもとに東京市や区を吸収するという大変集権的な制度をとった。都は市や区の権限や財源を全部吸い上げてしまって、一種のモンスター行政体になってしまったわけです。同時に、大日本帝国の首都、「帝都」という正体不明のオーラを与えられたと言ってよいのではないかと思います。

これに対して、大阪市をはじめとするほかの大都市は特別市という制度を求めたわけです。住民に近い基礎的自治体という性格を保持しながら、大都市らしい役割や権限を持とうとする意図に基づく改革案だったわけです。

大阪市が「都」にならなかったのは、そういう意味でそれなりの思想的な根拠、理由があったということを改めて確認したい。「大阪都」案は言ってみれば、その戦中の雰囲気の中でできあがった「国の中の国」みたいな東京という行政体の後を追いかけようとする考え方でありまして、誇大妄想、時代錯誤で自治を忘れた中央集権主義的な考え方だという気がいたします。

(2022年11月11日)